
姫と破壊神

森崎優嘉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姫と破壊神

【Nコード】

N3603X

【作者名】

森崎優嘉

【あらすじ】

レイスウェイク大陸の中心に位置するミナユーイア王国。

ミナユーイア王国第一王女ナオレイア・イロール・ルク・ミナユーイアはある日、王宮に侵入してきた少年と出会う。そして何と、少年は破壊神ユーアストだった。お互いを敵視ではなく恋愛視してしまった二人、そんな二人の間にあるのは大きな壁。ナオレイアと破壊神ユーアストは大きな壁を越えられるのか？そして二人を待つ未来は……。

登場人物（前書き）

3作目です。みなさんよろしくお願い致します。

登場人物

ナオレイア・イロール・ルク・ミナユーイア 14歳

ミナユーイア王国第一王女。おとなしい性格だがたまにやんちゃな時も。

王女として教育されたがあまり王女っという感じではない。
親友のルーリスとミナリーゼが大好き。

破壊神ユースト 14歳

魔の三邪神の一人。三邪神の中でも一番の魔力を持っている。
よく散歩で人間界へ行くので、人間界にも知り合いが多い。

ユーリス・ベナ・ワータス 14歳

ナオレイアの親友。ワータス公爵令嬢だがすごく腹黒く、いつも小型ナイフを隠し持っている。

ミナリーゼ・エダ・マーブル 14歳

ナオレイアとユーリスの親友。二人にとってはお姉さんの存在だが、パニックになると暴走する。マーブル公爵令嬢。

登場人物（後書き）

まだまだ登場人物は続きます。

登場人物2

地理

アベール・ジワ・サトーレ 14歳

ナオレイア達三人の友人。ユリスにいつもからかわれている。サトーレ侯爵令嬢で、ある日をきっかけに破断神ユージアのことが好きになった。

破断神ユージア 14歳

魔の三邪神の一人。表は優男だが裏では恐怖と言われるほどの腹黒。

破罪神タツータ 14歳

魔の三邪神の一人。のんびりな性格だが怒ると怖い。ユージアの悪思考を止める係りになってしまっている。

地理

レイスウェイク大陸

北…レスヒージェ帝国

南…ナンジア王国

東…トウリウス王国

西…ザイロス帝国

中央…ミナユーイア王国

登場人物 2

地理（後書き）

次から本文です。

1 - (1) 少女とメイド(前書き)

本編始まります。

1 - (1) 少女とメイド

部屋にはペンで書く音しかしなかった。

窓からは青空の中、鳥達のさえずりが聞こえていたがペンの音でかき消されていた。そんな部屋に紙に何かを書いている少女がいた。

彼女は13、14歳ぐらいの少女だった。

彼女の机の周りには同じような紙が山のように積み重なっていた。

少女は紙に素早く何かを書き、重ねていた。

そんな中、扉がノックされた。

「どうぞ」

少女は手を止めずに言った。誰かが入って来ても視線も紙のほうに行っていてまた、入ってきた人も気にしていなかった。

「お茶をお持ち致しました」

入ってきた人はメイドだった。そしてメイドの言葉にようやく少女は手を止め、顔を上げた。

「ありがとうございます」

少女はメイドが置いてくれたカップを持ち口を付けた。

「終わりそうですか？」

「もう少して終わりそうよ、いつも思うのだけどリアが入れるお茶はとてもおいしいわね」

カップを置きメイドはリアに微笑んだ。

「恐れ入ります。明日はルース様とミナリーゼ様がいらっしゃいますからね姫様」

「…そうね、来るまでにこの山を片付けなければね」

「お手伝い致します」

ありがとうございます、と言ってペンを持って手を動かし始めた少女にリアは紙の山を整理し始めた。

「やっと終わった」

「そうでございますね」

少女とリアは空を見た。そこには綺麗な夕焼けが見えた。

「明日も晴れそうでございますね」

「そうね」

少女はそのままずっと空を見ていた。リアはカップにお茶を入れた。そして少女はカップを口にした。

「やっぱりおいしいわね」

万遍な笑みで言った少女にリアは微笑んだ。

明日は親友が来る、そう思って少女は目を閉じた。

1 - (1) 少女とメイド（後書き）

主人公の名前が出てきませんでしたね…
次回は必ず出ることになります。

誤字・脱字があったらどんどんお申し付けください。

11(2) 恐怖のユーリス

「おはようございます、ナオレイア様」

「ん…おはよう、リア」

少女…ナオレイアはベットから降りた。部屋の窓からは朝の日差しが差し込んでいた。

今日は大好きな親友が来る日…ナオレイアはこの日が待ち遠しかった。

ミナニューイア王国王宮の食卓宮。この部屋は国王が家族との食事をしたいとの要望で作られた。この部屋が出来てからは国王家族が集まり食事をしている。

「ナオレイア、今日はユーリスとミナリーゼが来るのでしょうか？よかったわね」

「はい！久しぶりに会うので楽しみです」

ふふ、とナオレイアに微笑むのはミナニューイア王国王妃でナオレイアの母であるミアージェ・イロール・ルク・ミナニューイア。

「二人も喜ぶだろう、本当によかったな」

そう言うのはミナニューイア王国国王でナオレイアの父であるケンタイロス・イロール・ルク・ミナニューイア。

二人の言葉に「はい！」と元気よく返事をしたナオレイアは二人を迎えるために「お先に失礼します」と言い、部屋を出た。

親友はすぐに来た。

「ナオ、久しぶりね〜」

「ミナリー！久しぶり！」

「…お変わりないみたいだねナオ」

「ユーリも元気でよかった」

ナオレイアは親友のミナリーゼとユーリスに抱きついた。

「…ナオは相変わらず子供だね」

ユーリスはナオレイアの頭を撫でた。

「私はもう大人だもん！」

「…14歳は、まだ子供」

「そんなこと言ったらユーリスも子供だもん！」

ナオレイアとルーリスが言い合っているとミナリーゼは苦笑いをしながらソファアに座り、リアの入れてくれた紅茶を飲んでいた。

「二人とも、もう良しなさいな〜リアがせっかく入れてくれたんだから早く飲まないで冷めちゃうよ？」

ミナリーゼの言葉にユーリスは頷きソファアに座り静かに飲んだ。

ナオレイアも渋々とソファアに座り紅茶を飲んだ。

「ところで、ユーリは相変わらずコーヒーなんだね」

ナオレイアはコーヒーを飲んでいるユーリスを見ながら言った。ミナリーゼも同じくユーリスを見た。

「ユーリス…本当に紅茶だめなの？」

ミナリーゼの言葉にユーリスはコクンと頷いた。

「紅茶だめ…コーヒーがいい」

ふ〜ん、とナオレイアは再び紅茶の入ったカップに口を付けた。

「あ、今日は夕方までここに居るんでしょう？」

「ええ、お父様が久しぶりにゆっくりしていきって」

「…私毛」

「そっか〜、じゃあまだゆっくりしていられるね」

ナオレイアが万遍な笑みをするとミナリーゼも万遍な笑みになった。
…ユーリスは相変わらず苦笑いだっただ。それを見たミナリーゼは
「ユーリス、スマイルスマイル！」
「うっ…強制しても無理だよ」
ミナリーゼはユーリスの頬をひっぱった。
「ミナ…ユーリが痛そうだよ…」
そう言いながらナオレイアは苦笑いをした。

今だに頬をひっぱるミナリーゼにユーリスの顔が変わった。

「……痛いのですけど」

ユーリスの手がミナリーゼの脇に行った。そしてユーリスはミナリーゼの脇を擦った。

「うひゃ！…！」

「お仕置き…だよ」

「ひょー！あ……きゃ！ゆ・ゆるして〜！！！！！」

擦り続けるユーリスについてミナリーゼは降参した。だがお仕置きはこれでは終わらなかった。

「…土下座しろ」

「え〜！！！」

叫ぶミナリーゼにユーリスは懐からナイフを取り出した。

（（ひっ…！））

ナイフを持ったユーリスにミナリーゼとナオレイアは青ざめた。

「土下座しないと…！すいませんでしたー！！！」

土下座をしながら謝るミナリーゼにユーリスは腹黒い笑みを浮かべていた。

（（ユ、ユーリスのドサー！腹黒ー！））

叫びたい気持ちになったが叫ぶとユーリスが怖いので叫べないミナリーゼとナオレイアであった。

1-1(2) 恐怖のユーリス(後書き)

やっと主人公の名前がでてきました！

誤字・脱字がありましたらお申し付けください。

1-1 (3) 綺麗(前書き)

遅れてすみません。

ナオレイアの部屋は微妙な空気が漂っていた。

ナオレイアとミナリーゼは顔が青ざめていた。しかし、その原因を作ったユーリスはというと…

「ユーリス様、おかわりをどうぞ」

「ありがとうリア」

…リアが入れたコーヒーを飲んでいた。

「ナオレイア様とミナリーゼ様もどうぞ」

「あ、ありがとうリア」

「…ありがとうございます」

（（リア〜！助かったよ〜））

リアは二人の気持ちを感じ取ったのか二人に頷いた。

リアが部屋から出て行き、また3人になった。部屋は静かになり、窓からは日が差していた。ナオレイアは紅茶を飲んでいるミナリーゼと窓越しに外を見ているユーリスを見た。

（二人ともきれいだな〜）

ミナリーゼはお姉さんの存在でミナリーゼの笑顔がナオレイアは好きだ。ユーリスは途轍もなく腹黒のドSだがいつもは優しく稀に見せる笑顔はとても綺麗な。そんな二人をずっとナオレイアは見ていた。

（それに比べて私は…）

ナオレイアは自分に自信が持てなかった。周りの人達は綺麗だと言うけどナオレイアはどうしてもその言葉がお世話だと思えなかった。

ナオレイアがそう思っているとユーリスと目が合った。

「どうしたの、ナオ」

「…二人とも綺麗だなくって思ってたの。それに比べて私なんか…」
ユーリスは黙ってナオレイアを見た。

「ナオレイアも十分綺麗よ？」

「ミナリーゼはナオレイアの手を握った。」

「…」

ナオレイアは俯いた。

（私は…）

そこでずっと黙っていたユーリスが口を開いた。

「ナオ…貴方は本当に馬鹿ね」

その言葉にミナリーゼは驚き、ナオレイアは顔を上げた。

「ナオ、貴方は本当に馬鹿な人ね…どうして『綺麗』という言葉を否定するの。貴方は本当に綺麗な人よ？体も、心も…貴方にはミナユーリア王国の姫としての立派で元気な姿をしているの…なぜナオは否定するの？」

「私は…ただ…」

「ただ…何？貴方は何を望んでいるの？皆に何て言って欲しいの？この世界には綺麗な人と綺麗じゃない人がいるわ、綺麗じゃない人は奴隷になったりするの。貴方はただその人たちに同情しているだけじゃないの？」

「違う！私はこの国の姫として！国民全員の事お思っ…奴隷なんて言葉が消えてほしくて…」

ナオレイアは泣きながらユーリスに思いを伝えた。ミナリーゼはそんなナオレイアは抱きしめた。

ユーリスは目を閉じて何かを耐えていた。そして目を開けた。

「ナオ、貴方の考えはいい事…でも…奴隷は永遠に消えない…それに、奴隷になつてしまった人は2度と帰ってこない。一生懸命に奴隷組織を探っても出てくるのは奴隷の死体のみ…」

ナオレイアは驚いてユーリスを見た。ユーリスは悲しそうな顔をし

ていた。

「死体はみんな苦しそうな顔…それが毎日…ナオ…これが日常なの、だから…綺麗を否定しないで。貴方は本当に綺麗なんだから」

「ユリス…」

「そうよ、ナオ」

ナオレイアはミナリーゼとユリスを見た。

「うん二人ともありがとう」

ミナリーゼは微笑み、ユリスは頷いた。

まだ1日はこれから始まる。

（ナオ、貴方の力で奴隷をなくしなさい…それが皆の願いなのだから私は、もう嫌なの…奴隷達の苦しそうな死に顔を見るのが…何対葬らなくてはならないの…

だから期待しているのよ？ナオレイア…私を思う存分楽しませてね？それが私と彼の願いだから）

1-1 (3) 綺麗(後書き)

最後の『彼』とは誰でしょうかね…

まずいです、私も分からなくなってきました！

誤字・脱字があったら言ってください。

1 - (4) 新たな進展

3人は色々な話をした。

家での出来事や噂などを話していた。

「そういえば最近、破壊神を見た人が何人か出てきているみたいよ？」

「破壊神？」

ナオレイアは首を傾げた。破壊神は知っている。だがそれは本の物語に出てきているぐらいで本物がいるとは聞いたことも無かった。

「見たつていうことはこの世界にいるってことでしょうか？…怖いわね」

ミナリーゼは頷いた。

「ナオも気を付けてね？」

「そうね…ミナリーも気を付けて、ユーリも…ユーリ？」

ナオレイアはユーリスを見た。ユーリスは窓の外を睨んでいた。

「どうしたのユーリス？」

ミナリーゼも心配そうにユーリスを見た。

ユーリスはナオレイアとミナリーゼを見た。その顔にはいつもの表情になつていた。

「二人とも…今日は特に注意して。なるべく人気がある場所においてユーリスの顔は少し厳しかった。」

「今日は…特に夜。『奴』が来る」

二人には『奴』が誰なのか聞こうとしたがユーリスが再び窓を見たので聞かなかつた。

聞くな、とユーリスが言っているように思えた。

日が沈もうとしていた。ユーリスとミナリーゼも馬車に乗り、自分

の屋敷へ帰った。

ナオレイアは考えていた。破壊神のこと、『奴』のこと…もしかしたらユーリスは何か知っているのかもしれない。破壊神は正直言っていると怖い存在だと思う。

(あまり一人でいては駄目ね)

ナオレイアは大好きな親友の忠告をしつかり守ることにした。

* * *

少し賑やかな夜の城下町。ここにはたくさんの方が暮らしている。今日もここは賑やか。そんな所に一人の少年が歩いていた。歳は14歳だろうか、茶髪に金の瞳。

少年は賑やかな町を横目で見ながらある場所へと向かった。

そこは森だった。森のすぐ近くはミナユーリア王国の王城がある。

「いつ見てもデカイねえ」

少年は城を見上げた。

「んじゃ、侵入」

少年は言いながら一瞬にして姿を消した。

2・(1) 出会い

「ナオレイア、今日は楽しめたか？」

「はい！二人とも元気そうで何よりでした」

「よかったわね」

食事中、ナオレイアは今日の話をした。もちろんその話の中には破壊神の事もあった。破壊神についてはナオレイアの父、ケンタイロスは難しい顔をした。

「それで、ユーリが今日は特に注意しろって言っていたの」

ミアージュは頷いた。

「気を付けるのよ？ナオレイア」

ナオレイアは頷きケンタイロスを見た。だがケンタイロスは何か呟いていた。

「破壊神…だが目撃情報はある…しかし、いや、あやつの娘だしな…ふむ」

「お父様？」

ケンタイロスは一つ頷いてからナオレイアを見た。

「うむ、ナオレイア…ユーリスの言うとおりこれからあまり部屋を出るな、出るときは護衛を連れて行くんだぞ？」

「はい。分かりました…お父様もお母様もどうかお気を付けて」

ナオレイアはそう言って食卓宮を出た。

ナオレイアは王宮の廊下を歩きながら斜め後ろに歩いている専属侍女であるリアに声を掛けた。

「ねえリア、破壊神なんて本当にいるのかしら？」

「私も見たことはありませんので分かりませんが、目撃情報は確かな事のようにすし本当にいると思われませんが…」

「そうよね」

《破壊神は本当にいるよ》

「え？」

「どうかしましたかナオレイア様？」

ナオレイアは声が聞こえた方を見た。しかしそこには誰も居なかった。不思議そうに見るリアに何でもない、と言いままた歩き出した。

* * *

ナオレイア達が歩き出した時、ナオレイアが見た場所には一人の少年がいた。茶髪に金色の瞳、整った顔立ちの少年はニヤツと笑った。「面白そうな姫発見」

少年はナオレイア達の後ろを見た。ナオレイアは気付いていなかった。

「よし決めた、あの姫に会おう」

少年はククツと笑うと一瞬にして姿を消した。

* * *

ナオレイアは自分の部屋の椅子に座った。窓を見たら外はもう真っ暗だった。町の明かりが綺麗に見える、そう思いながらナオレイアはリアが入れてくれた紅茶を飲んだ。そしてナオレイアは窓の近くに行き下を見た。下には庭がある…だがそこに一人の少年がこちらを見ていた。

「…誰？」

ナオレイアは呟き急いで部屋を出て庭に行った。庭にはまだ少年がいた。少年はナオレイアに気付き振り向いた。ナオレイアは少年の金の瞳が光っている様に見えて驚いた。

「…貴方は誰？」

ナオレイアは警戒した。少年はナオレイアと同じ年齢ぐらいであった。しかしここは王宮、貴族の子息でもありえないと思うがナオレイアは少年が貴族ではない気がした。

「初めまして姫、僕は破壊神ユーアストと申します。以後お見知りおきを」

「破壊神？貴方が？」

ナオレイアは一步後ろへ下がった。

「疑うのであれば別に信じなくてもいい」

ユーアストは苦笑いを浮かべた。ナオレイアは少し警戒を解いた。

「貴方は何をするためにここへ来たの？」

「ただの散歩だよ…僕は散歩が好きなんだ、人間界は散歩しやすいからね。まあ…無断でこっちに来たからあいつは絶対に怒ってるだろうけど…」

ユーアストは思い出すように言った、その顔は少し青ざめていた。その様子にナオレイアはクスツと笑った。

「ふふ…無断で来たなんて、怒られるのは貴方の自業自得よ」

そう言っただけで笑い出したナオレイアにユーアストは眉をひそめた。

「それはひどいよ姫」

2・(2) 勝手に話を進めないで！

「貴方、私が想像していた破壊神よりもぜんぜん違うのね」

「…どんな想像してたんだよ」

ナオレイアとユーアストは庭を歩きながら話していた。

「それは…本みたいに人間に害を与える見たいな？」

「僕はそんな事したくないよ、人間は一生懸命生きているんだ、その一生懸命さを壊したくない」

ナオレイアは笑った。

「貴方は優しいのね…あ、そうだ！ねえ、貴方のことをユーアって呼んでいい？私の事はナオって呼んでくれていいわ」

「ああいいよ、よろしくねナオ」

「こちらこそよろしくねユーア」

そして二人は笑い合った。風が吹いた、ユーアストはその風に眉をひそめた。そして周りを見た。

「ユーア？」

ナオレイアはユーアストを見た。ユーアストは笑うとナオレイアの頭を撫でた。

「気軽にナオに触れないで」

「別にいいと思うよ？あの二人、お似合いだし」

ナオレイアとユーアストは声がする方を見た、そこには1組の男女が居た。ナオレイアは女の方を見て、ユーアストは男の方を見て驚いた。

「ユーリ!？」

「ユージ!？」

ユーリスは苦笑いをした、隣には破断神ユージアが腹黒い笑みを浮かべていた。

「ナオ、何で部屋から出てしまったの…」

「仕方ないさ、それが運命だ」

「黙りなさいこの腹黒が」
睨みつけてくるユーリスにユージアは苦笑いをした。

そんなやり取りを見ていたナオレイアとユーアストはお互いを見た。

「ねえユーア、私の親友の隣にいる人は誰？」

「破断神ユージア、僕と彼、あともう一人破罪神タツタっていう奴がいてね3人を合わせて魔の三邪神と呼ばれているんだ。」

「へへえ」

ナオレイアとユーアストはまだ言い合いを続けている二人を見て溜息をついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3603x/>

姫と破壊神

2011年12月29日17時02分発行